
空への道行き

土田かこつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空への道行き

【Nコード】

N5610Z

【作者名】

土田かこつ

【あらすじ】

「一週間僕に付き合ってくれたら、痛みのない方法で君を殺してあげる」

古びたビルの屋上、少女の飛び降りを引き止めた謎の男は軽薄そうな顔でそう言った……。

偶然の邂逅が少女の過去に光をあてる。

売れない作家の計画。死にたがりの少女の打算。

二人の思惑の行方はいかに。

シリアスよりの青春もの。ラストは救いのあるものになる予定です。

いつか見た空の色・1

その黒い小さな箱を開けた瞬間、彼が息をのむのがわかった。

きらびやかな電飾に彩られた並木道。

傍らに並ぶベンチで、隣に座る彼の顔を見上げた。

橙の柔らかな明かりが横顔を照らし出す。

手渡したばかりの小箱の中には、銀の十字架のネックレスがあるはずだ。

クリスマスにかこつけた、彼への初めてのプレゼント。

もちろんちゃんと男物で、デザインもそれほど派手じゃないものを選んだつもりだった。

だが。

ふたに右手をそえた彼は箱の中身を見つめたまま動かない。

怪訝と言うより不安になる。

もともとネックレス自体は自分の選択ではなく彼のリクエストだったのだが。

好みに合わなかったのだろうか。

「シルバーのクロス、欲しいって言ってたでしょう？」

見かねて声をかけると、彼は大きくため息をついて顔を上げた。

吐き出された呼気が白い。

「つけていい？」

こつちが頷くよりも先に、長めの鎖を頭からかぶるようにして首にかけた。

深緑のセーターに銀色がよく映える。

シンプルな形も線の細い彼にあっていた。

「なかなか様になってるじゃん」

ほっとして少し笑う。

彼はネックレスを確かめるように俯いた。

「ん、ありがと」

つと、彼の手が伸ばされた。

髪にごみでもついてたか、とぼんやりと見送った腕は視界の横を通りすぎ……、気づけば体を引き寄せられた。

「！」

呼吸が近い。息がつまって言葉が出ない。体が熱を上げていく。自分の心臓の音ばかりがうるさく、彼の鼓動が感じられない。

「……ちよつ、と」

みじろぎしようにも抱きすくめた腕はゆるがない。

油断した。

普段から態度や口ぶりこそ積極的だが、彼が直接に触れてくることはなかった。

せいぜい制服の上から捕まれるか髪の毛をかき回すくらいがいいところで、手をつないだこともない。歩くときは必ず人一人分間をあけていた。

もどかしくも心安い距離感を、これまでずっと保ってきたのに。

「ああい」

声が少しだけくもって耳に届く。

「なんか、ちよつと泣きそう」

「馬鹿」

甘えをふくんだ声が少しだけ情けなくて笑った。

ようやく体から力が抜けて、彼の肩にあごをのせる。

「うん。馬鹿だなあ」

ため息とともに吐き出された言葉が冷たく耳をくすぐって消えていった。

寒かった。

街中がむやみやたらにきらきらしていた。

でもそれが苦にならないくらいには自分も浮かっていた。
そんな季節。
今は、昔の。

憂鬱な月曜日・1

ぼんやりと白い、うす曇りの空を見上げて少女はため息をついた。

休み明けの月曜日、気だるい空気がただよう平日の昼下がり。

おそらく、はたからすれば気まぐれに授業をサボった女子高生が暇をもてあましてるように見えただろう。

彼女が腰掛けているのが、古びたビルの屋上の錆びた鉄柵でもなければ。

そこは駅前通りから離れた町のはずれにある、開発から取り残された古いビルだった。

もともと電子部品メーカーの自社ビルだった。会社は倒産したものの建物は放置され、そのまま用途のないオブジェのように町に居座り続けた。

もっとも、最近では肝試しの子どもたちやじゃれつく場所を探すカップルによって新たな需要を得ていたようでもある。

少女は柵の外に投げ出した両足を揺らしながら空を見ていた。

その顔に思いつめたような表情はない。ただ何かをふっきったような目で空をながめていた。

（私が飛び降りたら）

ここは危ない場所として再び封鎖されることになるのだろうか。子供たちから秘密の遊び場を奪ってしまうのはしのびないかな、なんて考えが頭をよぎって苦笑した。

しかたない。

どうしようもない。

どうでもいい。

乾いたあきらめが感情を支配していく。

視線を下に落とす。

見慣れたローファーのはるか先、コンクリートの地面。
彼女の最後の目的地。

もう一度顔を上げ、白い空を焼き付けてまぶたを閉じる。

そのまま何もない中空に身を躍らせようとかかどで鉄柵を蹴りつけ、

「！」

瞬間、身体に衝撃が走った。

予想していた浮遊感はない。

地面に打ち付けられた？ まさか。

こんなに意識が残るはずがない。痛みもない。

第一、感じた力が前へではなくうしろへの。

困惑する少女の頭上で誰かがため息をつく気配がした。

「落ちたら痛いぞ？」

頭のすぐ上から聞こえたのは、的確なようでひどく的確はずれな言葉だった。

飛び降りようとした瞬間に少女を後ろから抱きよせて引き止めた

男は、そのまま抱えあげて柵の内側におろしてしまった。

下から見えたからね、間に合ってよかったよ。

どこか真剣味にかける口調であっさりと言われて唇を噛む。

エレベーターは動かない。下から階段で上ってくるにはそれなりに時間がかかるはずだ。

そんなに長い時間、空に見とれていたのか。

あの古い非常階段を音もなく駆け上げられるはずもないのに足音さ

え気づかなかった。

そんなに自分の意識に気をとられていたのか。

「なんでとめたの」

理由なんて聞いても意味はない。通りすがりのお人よしに決まってる。

わかっていても言わずにはいらなかった。

「んー。可愛い女の子がいなくなるってのは世の中にとって結構な損失だろう?」

状況に似合わぬ軽口に、あらためて男を見る。

ダークグレーの長いコート。中のセーター靴も、目深にかぶったつばの広い帽子もすべて黒に近い灰色だ。肌も浅黒い。夕闇の中にいたら保護色になって見えなくなってしまうそうだ。

顔は若く見える。だがどこか時代がずれたような格好だった。

「おとなしいね、君」

黙ったままの少女に男が笑いかける。

「こういうの止められた人って、正直もつと抵抗するものだと思うてた」

目をそらしてそっけなく言う。

「別に。死ぬのなんていつでもできる」

止められたことは腹立たしいが、こうなった以上ことを荒立てずにすませるべきだろう。

警察や家に連絡がいくようなことになれば二度目がやりにくくなる。

幸い男はあまり生真面目なタイプではなさそうだ。

騒がなければきっとこの場を切り抜けられる。そう算段をつけた。だが。

「じゃあさ。一週間だけ僕に付き合ってくれないかな」

緊張感のない声が少女の期待を裏切った。死にぞこないにどんなナンパだ。

呆れた少女が突き放すより先に、男が低くささやいた。

「一週間付き合ってくれたら、痛みのない方法で君を殺してあげる」

軽い口調はそのままの物騒な物言い。

だが、少女にはこの上なく魅力的な条件で。

しかめた顔を覗き込む男の表情は軽薄そうなくせにどこか底知れない。

「自殺の手助けは犯罪でしょう」

口をついてでた言葉は自分でも言い訳めいていて。

新手の詐欺にでも引っかかったような気分で相手をにらんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5610z/>

空への道行き

2011年12月19日20時57分発行